

「生き抜く力」 「今」

と「ここ」を大切に生きる。

## 姜尚中氏特別講演会

東北学院創立百二十五周年と本学文学部総合人文学科開設を記念した特別講演

（東北学院大・河北新報社主催）が九月十日、土樋キヤンパスの押川記念ホールで開かれ、東大大学院教授の姜尚中氏が「生き抜く力」と題して講演した。講演会には抽選で選ばれた学生、市民ら約七百名が参加した。

## ホールと講義室を結んで

会場は当初東京エレクトロン宮城を予定していたが、震災の影響で本学での開催となったため、講演はホールと二講義室をライブ映像で結んで行われた。

講演に先立って星宮学長が、「東日本大震災では本学も多大な被害を受けたが、多くの支援をいただき、何とか講義を始めることができた」と謝辞を述べ、「姜先生の講演は、私たちのこれから歩みと励ましの大きな力となる」とあいさつした。

## 生きている時代を考える

東日本大震災で、「3・11」以前と以後、そこには深い

断絶が走っている。それがわからなければ、これから進んでいく方向もわからない。「頑張ろう」というだけでは「内なる力」「生き抜く力」はわいてこない。

あの日から普通の日常生活の安心や安全が失われ、人生の根幹にかかわる様々な選択を強いられている。こうした時に私たちは「なぜこうなるのか」だけでなく、「自分は今、いったいどこにいるのか」「自分たちは何者であったのか」ということまで考えざるを得ない。それは、今回の震災と原発事故が私たちに突きつけた大きな課題だ。

「おまえはどこにいる」

時代と波長が合わず、「自分は何者か」という自問に怒りのようなものを感じていた『0年代の終わり、西ドイツに留学した私はミュンヘンの美術館で、15世紀から16世紀にかけて活躍した画家のアルブレヒト・デューラーと出会った。彼の自画像は私をじっとみつめ、「おまえは今どこにいる」と問いかけてきた。

デューラーの母親は15人の子どもを産んだが、生き残ったのは2人。そして現在、大震災での多くの犠牲者。生と死はかくも近いところにあった。彼は今とまさしく同じような時代を生

きていた。

と語っているようだ。

### 希望は仄かな光から

「メランコリア1」という作品は示唆深い。大きな翼をもった女性が黒い顔をして、遠くを眺めている、

メランコリックになることは決して悪いことではない。希望は明るい社会から生まれるのではなく、暗い苦しみの中に点る仄かな光から成り立つ。

窓の向こうには大洪水か津波の後の死の静けさが描かれ、女性のまわりには科学や技芸を暗示する物が散乱している。生活を便利にする科学や技術は一方で死を増幅させる。私たちはこの絵から3・11以降の時代を考え、生きる意味を自問する。

その中で女性の輝く目は、「わたしはここにいる。ここで生きて、創造していく」

### 「今」と「ここ」を大切に

われわれは今、戦後60数年にはなかった大きな転換点を迎えている。「われわれはどこへ向かうのか」。10年経てばある程度の答えは出るはずだ。苦しい時、病んでいる時は、「今」と「ここ」を一生懸命に生きることに、なぜ生きるのかを考え続けることだ。思慮のない楽観主義よりは思慮深い悲

観主義の方がはるかにいい。  
私たちは、しっかりと自分  
をみつめ、大切な人を大切  
にしてこれからの10年を歩  
んでいかなくてはならない。

「幸福」は目的ではなく  
結果だ。人生がわれわれに  
投げかける問いにひとつひ  
とつ答えていくことが生き  
る意味につながっていく。